ソウスレバ蒸和ハ充分ノ加壓ノ下ニ行ハレ從ツテ出來上ツタ義齒ノ接著モヨクナル譯タトナルノデアル。又蒸和護謨ノ攝氏一〇〇乃至一四〇度時ニ起キル第二次ノ膨脹ニヨル變形ハ、空洞ヲ上記ノホーウ氏ノ溝ト結ブコトニヨリ避ケラレルノデアル、而シテ一般ニ此ノ溝ハ必ズ舌側ニ作ラレチバナラヌノデ、之ニ依テ人工齒齦タルベキ「ピンク」色ノ蒸和護謨ニ赤護謨ガ交ツテ變ナ模様ガ生ズル様ナ心配モナイノデアル。

如何ナル方法ニヨルトモ避クベカラザル收縮ニヨル義齒床ノ變形ニ對シ、著者ハ模型ヲ錫箔ニヨリ敵フコトニヨリ多少矯正シ得ベシト信ジテイル。即チ蒸和護謨ハ收縮ニ際シテカラ、石膏ノ如キ粗造面カラヨリモ錫箔ノ如キ平滑面ノ方ガヨク容易ニ剥レルカラ、從テ變形モ僅カナラント思惟スルノデアル。而シテ一般ニ錫箔ハ六〇番ノ厚サノモノガ適當スルノデ、餘リニ薄キハ容易ニ粘著シ易ク、又餘リニ厚キハ熱ノ傳導餘リニ強キガ爲メデアル。

又孔明キ陶齒ノ孔ヲ塞グニハ「ピンク」ガ適當シテイルシ、赤護謨ハ「ピン」陶齒ヲ保持スルニ良イ様ダ。此外赤護謨ハ上下顎總義齒ノ床ニ適當シ、「ピンク」護謨ハ人工齒齦ニ、ソシテ黑護謨ハ大量ノ不純護謨ヲ含有シ從ツテ變形率大ナルヲ以テ、只上顎局部床ニノミ適應シテイル。又下顎ニ於テハ粘膜面ニ觸レナイ部分ヲ「アマルガム」入ノ蒸和護謨ヲ使用スルコトモアル。

最後ニ蒸和操作ハ次ノ順序デ行フベキダ。

(一)準備期タル攝氏一六〇乃至一六五度ニ達セシムルニハ、中位ノ大サノ義齒ニ向ツテハ大凡四〇分、大キナモノニ向ツテハ更ニ五分乃至二〇分ヲ加ヘル。

(二)攝氏一六五度デ一時間蒸和スル。

(三)徐々ニ〇度迄冷却スル。

本研究ニハ十二個ノ插圖アリ、一層讀者ノ興味ヲ惹起シテイル。

矯正科

永久齒ノ根尖端並吸收ニ對スル研究ノ豫

備的報告

(By. A. H. Ketcham D. D. S. Denver, Colo.) A Preliminary report of an investigation of apical root resorption of permanent Teeth. The International Journal of orthodontia February, 1927 (Vol. VXIII No. 2)

著者ハ彼自身矯正手術ヲ行ヒタル三百八十五例ノ齒根ノ狀態ヲレントゲン寫真ヲ以テ研究シタ結果其ノ根尖端ニ吸收ヲ起シテ居

ツタ例ガ非常ニ多數アツタノデ此報告ヲ第一回萬國矯正齒科醫學大會ニ發表シタ。著者自身ノ經驗シタ類例ノミデハ此ヤウナ現象ガ一地方ニノミニ限局シテオルノデハナイカト云フ懸念ガアル所カラ廣ク一般齒科醫カラモ其報告ヲ蒐集シテ互ノ研究ヲ行ツタ。

其ノ研究ノ結果ニ依ルト三百八十五例中八十二例即チ二十一「バーセント」ニ於テハ其ノ前齒ノ根尖端ニ明瞭ニ吸收ヲ認メタ。

此ノ八十二例中上顎齒牙及ビ下顎齒牙トニ於イテ其ノ吸收ノ起ツタ程度ヲ比較研究スルト二十七例ハ上下顎共ニ根尖端ニ吸收ガ起ツテオリ五十二例ハ下顎齒ニハ何等ノ變化ヲ認メナイケレドモ上顎齒ニハ前述同様根尖端ノ吸收ヲ發見シタ。最後ノ三例ハ前者ト全ク反對デアツテ上顎齒ニハ何等吸收ノ狀態ハ認メナイケレドモ下顎齒ニノミ其レヲ發見シタノデアル。即チ上顎齒窩ニ於イテハ八十二例中七十九例(九十六「バーセント」)ト云フ多數ノ根尖端ノ吸收ヲ認メテオルノニ反シテ下顎齒窩ニ於テハ八十二例中僅カニ三十一例(三十七「バーセント」)ト云フ比較的少數ノ吸收機轉ヲ認メタノニ過ギナイ。

此ノ成績ニ依ツテモ上顎齒ガ下顎齒ニ比シテ其ノ根尖端ニ受クル影響ガ如何ニ大デアルカト云フコトガワカル。

次ニ矯正器ノ種類ニ依リマシテ根尖端ノ吸收機轉ニ如何ナル差違ガアルカト云フト(Pin and Tube Appliance)ヲ使用シタ十二例ノ結果ハ其ノ三例ニ於キマシテハ明瞭ニ前齒部ニ吸收ヲ認メ、他ノ一例ハ上顎齒ニハ何等ノ變化ヲ認メナイケレドモ下顎前齒部ニハ二、三根尖端ノ吸收ヲ證明シ得タノデアル。Ribbon arch Applianceヲ使用シタ四十六例中十一例ニ於テハ上下顎共ニ其ノ前齒部

ノ根端ニ多少ノ吸收ヲ認メ他ノ十一例ニ於テハ下顎齒ニハ何等變化ガナイガ上顎前齒部ニノミ吸收機轉ヲ認メ他ノ一例ハ上顎齒ニハ何等ノ變化ガナイガ僅カニ下顎齒根ノ吸收ヲ認メタニ過ギナカツタ。此レ等ノ結果ヲ綜合シテ見ルト六十二例中二十五例ハ其ノ前齒部ニ明瞭ニ根尖端ノ吸收ヲ證明シタノデアル。次ギニ唇側擴大線ヲ使用シタ四十二例ノ結果ハ殆ド上下顎共ニ其ノ齒根部ニ何等ノ變化ヲ認メナカツタケレドモ僅カイ二、三例、上顎齒牙ニ吸收ノ狀態ヲ認タノミデアツタ。

Lingual arch.ヲ使用シタ結果ハ六十一例中僅カニ一例上下齒窩ヲ通ジテ吸收ノ變化ヲ起シテオルノヲ發見シタノニ過ギナイ。其ノ他ノ一例ハ下顎齒ニハ變化ナク上顎齒根ニノミ吸收狀態ヲ示シテオツタ。其ノ他上下齒窩ニ互ニ異ツテオツタマ、矯正器ヲ使用シタ場合ニ兩齒窩ノ齒牙ニ起ル變化等ヲ比較研究シタ結果其ノ結論トシテ齒根尖端ノ吸收ハ矯正家ガ如何ニ周密ナル注意ノ下ニ矯正手術ヲ行ツテモ猶ホ此ノ種ノ變化ノ齒根ニ起ル所ヲ見レバ恐ラク矯正器以外ニモ何等カ特殊ナル原因例之ヘバアル患者ガ器械的刺戟ニ對シテ殊異ナル感受性ヲ存シテオツテ其レガタメニアル患者ニ對シテハ何等ノ障礙ヲ與ヘナイ様ナ矯正器ノ器械的刺戟モ他ノ患者ニハアル種ノ病的變化ヲ惹起セシメ得ル様ナ事實ガアルコトハ疑ヒヲサシ挟ム餘地ガナイノデアル。以上ノヤウナ事實ニ依リ

マシテモ矯正家ハ矯正手術開始前ニハ必ズ「レントゲン」寫眞ヲ撮影シテ此レニ依ツテ其ノ手術中起ル齒根尖端ノ變化ニ周密ナル注意ヲ拂フ必要ガアルノデアル。

齒科隣接領域

消化ニ對スル齒牙ノ意義ニ就テ

(Bedeutung der Zähne für die Verdaunung, von Dr. Med.

Hans Pfleger, D. Monatsschr. f. Zahnheilk. Heft 6, 45,

Jahrgang, 15. März 1927)

咀嚼作用ノ消化ニ對スル大ナル意義ヲ有スルコトハ衆知ノ事デアル。咀嚼ハ唾液分泌ヲ促進シ、食物ハ唾液ニ浸潤サレ且唾液中心ノ粘液素ニ依テ滑カニサレ狭キ食道ヲ圓滑ニ通過スルコトガ出來ル。咀嚼ハ同時ニ胃腸液ノ分泌ヲ促進シ腸運動ヲ惹起スル。コレ等ノコトハ動物實驗ニ於テ異議ナク立證サレテ居ル。然ルニ齒牙ノ器械的粉碎ガ消化ニ及ボス意義ニ付テハ尙ホ殘サレタ問題デアアル。粉碎ノ足りヌ食物ハ消化ガ惡イ而モ消化ノ程度ハ食物ノ胃中ニ停滞スル時間ノ長短ニ依テ定マルト云フコトハ重大ナ問題デアアル。食物ノ正常ナル粉碎ガ長時日障礙サレルナラバ一般ノ解釋ニ從ヘバ胃ノ障礙ヲ來スベキデアル、即胃液腺ノ過重及胃筋肉ノ過勞ヲ來ス。ケストチルハ犬ニ十二指腸瘻孔ヲ作ツテ粗大ナ肉片ハ細碎サレタ肉片ヨリモ約一時間長ク胃中ニ止マルコトヲ證明シ

タ。同時ニコノ十二指腸瘻孔カラ集メタ胃液ノ觀察ニ依テ粗大ナ食物ニヨル胃ノ高度ノ過重ハ腸ニ對スル愛撫ヲ意味シ反對ニ細碎サレタモノハ胃ニ對シテハ僅少腸ニ對シテハ大ナル仕事ヲ課スルコトヲ證明シタ。

之ニ反シテオイレルハ胃内ニ止マル時間ノ長短ハ消化ニ無關係デアル而モ著シキ停滞ハ有害デアルト考ヘヨク粉碎サレナイ食物ハ生物ニ取テ不利益デアルト解シタ。彼ハ動物實驗ヲ放棄シタ即瘻孔ヲ作ツタ動物ノ胃ハ正常ナ人間ノ場合ト同一ニ考ヘルコトハ出來ナイト解シタ。彼ハ自分自身ニツイテ實驗ヲ試ミタ、試驗食ノ後胃消息子(「マーゲンゾンデ」)ヲ插入シ食糜ノ一部ヲトリ細碎サレタ肉類ハ普通ノ場合ヨリ三十分モ早く排泄サレテ居ルコトヲ確定シタ。

ミヘルハ屎便ノ分析ニ解釋ヲ求メタ。咀嚼ノ足りヌ動物食ハ胃腸ニ於テ十分消化サレルガ植物性食ハ然ラザルコトヲ見出シタ。尿中ニ存スル澱粉殘物ハ齒牙ノ作用ニ對スル斷案ヲ下サシムルモノデアアル。彼ハ試驗者ヲヨク咀嚼スルモノト然ラザルモノトヲ區別シ而モ齒列ノ完全ナモノト然ラザルモノトヲ以テシタ。善ク咀嚼スルモノニハ澱粉ハホトンド證明サレナイ、齒列完ナレド早吞込スルモノニハ澱粉ガ常ニ存在スル、齒列ノ損ハレタルモノニ於テ咬交スル齒ノ少ナイ程多クノ澱粉ガ證明サレタ。齒列ノ損ハレ